

§ 2-3.

実験 B 全体考察

1. 顔の性別判断における肌色の作用

実験 B では種々の顔に対する性別判断を求めた。結論から言えば、色白、色黒というそれぞれの肌色は従来のジェンダーステレオタイプに沿った作用を持つ可能性が示された。

仮に色白肌、色黒肌という色彩情報が全ての形態に対して等しく作用するのならば、形態のみに対する判断を中心として各肌色のステレオタイプに沿った判断に引寄せられる傾向を呈する筈である。すなわち、形態のみに対する判断を基準として色白肌ならば女性判断が増加し、色黒肌ならば男性判断が増加する、といった具合である。しかし、実際の結果は一律の作用を示唆するものではなかった。肌色による有意な偏りが得られたのは、女性パタン合成率 50%と 60%の 2 パタンに限られたのである。それでは、この結果を踏まえた場合どのような形態条件において肌色の作用が大きいといえるのであろう。

ここでは、まず白黒刺激に対する判断を確認したい。50%パタンに対して観察者全体の 8 割程度、60%パタンでは 9 割以上が女性として判断している (Figure 2-1-2 参照)。前述の通り、これらの 2 つのパタンでは肌色間の差が有意であった。一方、肌色の作用が有意とならなかった 40%パタンに対する女性判断率は全体の 30%程度に留まった。この結果は肌色が作用する要件として形態的な女性性が存在することを示唆するものであり、形態のみで女性判断が優勢となる形態において肌色の作用が顕著となるということが考えられる。

また、何れのパタンにおいても白黒画像において得られた女性判断率の方が高く、色白肌であっても白黒画像の場合を上回ることはなかった。これより、本実験で得られた肌色間の差に対しては、色白肌が女性判断を押し上げたのではなく色黒肌が男性判断に引寄せたという解釈が妥当であるといえる。つまり、色白肌による女性判断の促進よりも色黒肌による女性判断の抑制というべき作用が強く捉えられたと言い得る。

2. 性別の印象における「飽和点」

実験 B-1 では形態要因のみによる性別判断の推移を確認したが、当該の判断の変化は合成率の影響を多分に受けるものの、両者の関係を単純な比例として捉えることは困難であった。Figure 2-1-2 に表れているように、女性パターン合成率 100% を待たずとも同合成率が 70% の段階で女性としての判断は 100% に限りなく近づく。逆に女性パターン合成率 0% (男性パターン合成率 100%) でなくとも、25% の段階でその女性判断率は 3% 未満まで減少する。つまり、男女どちらかのパタンの合成率が一定の段階まで高くなると判断が確実に安定し、それ以上は変化が見られなくなるのである。

判断がどちらかに偏るということは、換言すれば観察者群全体で見解が一致しているということになる。総じて、判断が安定するポイントが認められたという点が本実験結果の特徴であるといえる。男女の方向性で若干の違いはあると見られるが、男女どちらかのパターンが概して 3/4 含まれていれば性別の判断は安定すると考えられる。誰もが男性として判断する限界点、誰もが女性として判断する限界点として 3/4 という合成率の存在が提示されたともいえるが、これは男女の印象が飽和状態に達する「飽和点」としても捉えることができよう。

逆に、判断される性別が不安定となるのは 30~60% のパターンであった。仮に評定者全員の判断基準が完全に揃っていたならば 0% もしくは 100% の何れかが判断率として算出されるのみであり、その他の判断率は生じない。よって、観察者がそれぞれに持つ性別の境界は、ほぼこの範囲内に含まれると推測される。このことを踏まえれば、性別の境界は完全に共有されているものではなく、そのバリエーションが 30~60% の間で連続的に広がっているということが推察される。

3. 肌色と「飽和点」

この「飽和点」という考え方を以て実験 B-2 の結果を眺めると、色白肌条件では形態的により早く飽和点に達することが窺える。具体的には、60% パタンの段階で全体の 9 割以上の女性判断を受けており、75% パタンとの差が殆ど見られなくなるのである。逆に色黒肌に対する判断はより緩やかに変化しており、75% パタンであっても全体の 9 割程度の女性判断に留まっている上、60% パタンに対する判断との違いも比較的顕著であるといえる。これらの点については Figure 2-2-3

において明らかである。このような視点から肌色の作用を捉えた場合、色白肌は女性判断が飽和状態に達するための形態的条件をより緩やかにする方向に働くと考えられる。一方の色黒肌は当該の条件をより厳しくする方向に作用すると推察される。

4. 判断方略の変化

ここで、両実験に対する判断そのものを再検討してみたい。何故なら、40%、50%のパターンでは形態のみの条件よりも肌色を伴う場合において女性判断が低くなっているからである（色白肌、色黒肌とも）。換言すれば、肌色が伴った場合の方が男性として判断される確率が高くなるということになる。では、何故肌色を伴った場合において、男性判断が上昇する結果となったのであろうか。ここで浮上するのが刺激のバリエーションの影響である。

実験 B-1 においては形態パターンが豊富であり、その合成率のレンジは 0~100%となっている。一方の実験 B-2 では、形態が 25、40、50、60%、及び 75%の 5パターンであり、それぞれについて肌色が 2 種ずつ用意されているという違いがある。提示された刺激のバリエーションの中で基準点が設けられると考えれば、判断が定まりにくい 40、50%パターンにおいて基準点の変化が顕著に現れると推測される。実験 B-1 の結果を踏まえれば、40%パターンはやや男性寄り、50%パターンは女性寄りの印象にやや傾く形態であると捉えることができるが、肌色という情報が加わることによって、男性の判断基準、女性の判断基準がそれぞれより厳しくなると推測することも可能であろう。ここでは、意識されるかどうかに関わらず肌色という条件が性別判断のための必要条件として機能していたことも考えられる。

実験 B-1 の結果より、形態のみからであっても十分に性別判断は可能であると捉えられるが、情報の質の変化により認知のスタイルが切り替えられるということも推測される。形態情報のみに限定された場ではかたちから得られる印象に頼るか術はない。形態のうち、どの部分に着目するかという点においては方略上の多様性が生じるものと思われる。だが、その範囲は極めて限定されているといえる。他方、色彩情報が盛り込まれたときには肌色に依拠することもできる。逆に、形態のみ厳密に頼ろうとすることもできる。肌色に加わったことにより判断方略に変化が生じ、結果として基準の変動がもたらされた可能性についても考えてみる必要があると思われる。

5. 丸みの評定と性別判断

丸みに対する評定結果からは、形態的にどのような認知がなされていたかという点について窺い知ることができる。得られた丸みの評定平均値は合成率との相関が極めて高く、両者の関係は安定的に線形回帰することが捉えられた。つまり、丸みを帯びているという印象、逆に角張っているという印象は合成率によって確実に変化するといえる。この傾向は白黒であっても、肌色が加わった刺激であっても共通して認められたといえる。

また、丸みの印象の安定は性別判断の安定と密接な関係にあるということも推測される。本考察の第2項においても触れたように、30～60%の領域においては性別判断が不安定であり、最も変化が激しい（実験 B-1）。この領域内における丸みの評定を確認すると、3ポイントから4ポイントの間にほぼ収まっていることに気付く（Table 2-1-2 参照）。男性判断が安定する25%パターンでは、男性で2.611、女性で2.574、女性判断が安定する70%パターンでは、男性で4.487、女性で4.435という平均値が示されている。3ポイントは「やや角張った」、4ポイントは「やや丸みを帯びた」という段階にあたるが、丸みの印象における方向性が定まらない場合には性別の判断にもばらつきが生じ易いという関係性が見出される。これは逆に、性別の判断が定まらない場合には丸みの印象も中庸となると解釈することもできる。これより、丸みや角張った印象における方向性が明確に認知できれば、集団レベルにおいても判断が安定する傾向にあることが考えられる。

このような関係性を以て、肌色が加えられた実験 B-2 の結果を検討してみる。全体として女性判断に傾いているため女性側の判断についてのみ考察することになるが、9割程度の女性判断を得た刺激は、男女共60%-色白、75%-色白及び75%-色黒の3種であった。これらに対する丸み評定平均は何れも4ポイントを超えており、これら以外の刺激は全て4ポイント未満の評定に留まった（Table 3-1-2 参照）。つまり、肌の色が付加された場合であっても、形態のみの実験で見出された丸みと性別判断の規則性に適合する結果が得られたといえる。

6. 丸みの印象における肌色の作用

更に、丸みの印象には肌色による作用も認められた。男性では50、60、75%パターンにおいて、女性では25%及び60、75%パターンにおいて色白-色黒間の差が生

じることが統計的に示されたが（実験 B-2 3-3 項参照）、何れの場合も色白の方がより丸みを帯びて、色黒の方がより角張って評定されるという方向性を示した。つまり、色白肌には丸みを帯びた印象を増加させる、或いは角張った印象を低減する作用があり、色黒肌には角張った印象を増加させる、或いは丸みを帯びた印象を低減させる作用があると解釈することができる。

一般的に白は膨張色、黒は収縮色と位置づけられており、同じ形態であっても白はより大きく膨らんで見え、黒はより小さく引き締まって見えるとされる。90年代後半には、黒く日焼けした肌が「ガングロ」と称され一部で流行を見せたが、少女達の中には細く見えることを理由として「ガングロ」を目指した場合もあるとされる。本実験の結果は彼女達が求めていた肌色の効果を示すものでもあるといえる。

更に、本論の主題である肌色のジェンダーステレオタイプとの関連についても考えるべきところがある。序章においても示したように、Garn と Clark (1975) は進化論的な視点から肌色のジェンダーステレオタイプについて考察しているが、色白肌は脂肪の蓄積のシグナルであり、色黒肌は逆に脂肪が少ないことを示すものであるとされる。脂肪があるということからは柔らかくふくよかな状態が想像されるが、形態そのものよりも色と触感との連合から色白に対しより丸みを帯びた印象を受けた可能性もある。

しかし、ここには限定条件が必要である。男性観察者の場合は、女性パタンの合成率が高まる程、丸みの評定における肌色間の差は大きくなる傾向にあった。一方の女性観察者の場合は、男女どちらかのパタンが明確に優勢となる形態において差が顕著となることが窺われた。つまり、女性パタンが著しく優勢になる場合だけでなく、男性パタン優勢の場合においても肌色間の丸みの印象差が大きく見られたといえる。

女性パタン優勢の顔において得られた傾向については、顕著な色黒の女性の絶対数が少ないことに起因するところも大きいと思われる。色黒であると明確に判断される女性は男性に比して少ない。ここには色白をよしとする社会背景が関与しているであろうことは本論でも述べているが、結果としてスポーツ選手や屋外で働く女性等、限られた人物が主に色黒肌を呈することになる。このような中では、色黒肌=体力がある、筋肉があるという構図が出来上がるであろう。つまり、女性の場合には肌色間の違いが、男性以上に明確な生理的身体的差を示す指標として暗黙裡に利用されていることが考えられる。しかし、これのみでは女性において認められた

傾向、すなわち男性パタン優勢の顔における肌色間の差に対する説明はなされない。そこで考えられるのが、異性の肌色に対する感受性の高まりである。

蔵（1993）によって紹介されている今井、蛭川の調査では、男性は圧倒的に白い肌の女性を好み、女性は色黒の男性を好むという結果が得られたとされる。本実験のアンケートにおいてもその傾向は明瞭に把握できる。好ましい男性の肌色は圧倒的多数において「普通」～「やや色黒」であり、女性の肌色では「やや色白」～「色白」が殆どを占めた（Figure 3-2-6 参照）。また、蔵（1993）は、生物的な選好の結果として男性はより多くの脂肪が蓄積されていると推測される色白肌の女性を好むようになったという仮説を提示している。単純な好みとしてではなく、生物的に対象を選択するという意味では異性に対する感受性が高まることも利に適っていると考えられる。つまり、女性は男性の肌の色から身体の構成に関してより多くの情報を推測しようとし、逆に男性は女性の肌の色から同様の情報を得ようとするのではないかということである。本実験の結果のみからでは仮説の域を出ないが、ここでは可能性として指摘しておきたい。

7. 性別判断に対する観察者要因

Table 2-2-9 及び 2-2-10 に示されるように、肌色に対するジェンダーステレオタイプの強さによって顔の性別判断が大きく左右されるという結果は得られなかった。つまり、男性に色黒肌を望み、女性に色白肌を望むからといって、色黒の人物を男性と判断し易いわけではなく、また色白の人物を女性として判断し易いというわけでもないと捉えられる。ここではジェンダーステレオタイプの強さを推測する指標として各性別の好ましい肌色を利用したが、カテゴリ分けに工夫を加えた上、各カテゴリの人数を増やし追確認していくことが肝要であるといえる。

だが、本実験で得られた結果は性別判断である。男性-女性の判断を変化させる程でなくとも、印象の違いというレベルでは2群の間に差が生じていた可能性は残される。この点については実験Dにおいて検討していくこととする。

また、本実験では唯一60%-色黒の丸み評定においてステレオタイプ強度の作用が確認された（女性観察者のみ）。この結果は、弱ステレオタイプ群の方が強群よりも当該の刺激に対してより丸みの印象を受け取っていたことを示す。結果3-7においても言及したように、弱ステレオタイプ群では75%パタンにおいてのみ肌

色間の差が拡大している一方、強群では60%と75%の2パターンにおいて肌色間の差が明瞭となっている。この結果から推測すれば、丸みを帯びた印象が肌色によって変化するための形態的な条件は、ステレオタイプの認識がより強い場合においてより甘いのではないかということが考えられる。逆にそうした認識が弱い場合には、形態的な女性性がより強くなければ肌色による丸みの差を感じないと解釈される。

また、判断の性差は50%パターンにおいて特に生じた(実験B-1、B-2とも)。当該のパターンでは、女性の方がより女性判断に傾いたといえる。このような判断傾向は実験A-1においても確認されているが(第1章参照)、換言すれば評定者自らの性別に近付けて判断するということになる。ここから推測されることは、顔に対する接触経験における性差である。この点については、本研究における全実験を踏まえた上、総合考察において改めて検討することとする。

8. 性別判断における注目対象

目に対する注目はこれまでに行なわれた研究においても指摘されていることであるが(吉川, 1999a)、アンケートの結果からは性別を判断する場面においても自覚される注目対象は目であったということが捉えられる。Figure 2-2-4、2-2-5に示されるように眉や輪郭も多く選択されているが、これらの部位は先行研究においても性別識別における有用性が示されており(Yamaguchi, Hirukawa, & Kanazawa, 1995)、その指摘に適ったものであるといえる。また、本アンケート結果の特徴として肌色の選択頻度が高いことが挙げられるが、本実験では顔同士の形態的違いが乏しく、肌の色の差異こそが最も目立つ手がかりとなったことがこの結果の原因となっているものと推測する。

更に、日常的に性別を判断する場面では、実験場面に対する回答と殆ど傾向を同じくしているものの1箇所顕著に異なる部分が生じた。「肌の色」の選択が減少し、代わって「肌の質感」が多く選ばれたのである。つまり、日常的な場面においては、肌の色よりも、質感、テクスチャこそが手がかりとされる傾向にあるようである。序章でも述べたように、肌は層構造をなしているものであり、単純に色として捉えられない情報も多分に含まれる。個人差はあるが、男性に比べ女性の肌は全般的に透明感が高く、肌理も細かい(日本化粧品技術者会, 2003)。また、肌色は化粧等によって容易に変更できるといえるが、質感までを調整することは非常に困難であ

る。より人為的な変更の難しい要素に着目することにより、より精度の高い性別判断が可能となるとも考えられる。この傾向は判断方略の洗練として捉えることもできると思われるが、より安定的で差が明瞭に存在する要素が手がかりとして利用される傾向にあることが指摘できる。

9 肌色に対する意識

Figure 2-2-6 におけるグラフ群において明らかなように、実際の男女の像、そして表象される男女の像の双方において明確な違いが抽出された。肌色に対するジェンダーステレオタイプは根強く存在すると捉えることができる。

自己評価から実際の男女の肌色を窺い知ることができるが、主観的評価とはいえ男性において半数以上が「普通」と回答しているのに対し、女性では圧倒的に色白寄りの回答が多いといえることができる。更に、理想の肌色でもその差は明瞭である。男性は「普通」から「やや色黒」を目指し、女性は例外なく「色白」寄りを志向していることが分かる。

ここまでの結果においても男性の「普通」の選択頻度の高さが意識されるが、この「普通」という肌色について考えてみたい。

まず、「普通」という色は存在しない。平均的な肌色を「普通」とするとしても、その判断基準は万人に共有されていることを前提できるものではない。本アンケートでは飽くまでも主観的認識の抽出を目的として行なったが、「普通」とは色白でも色黒でもない肌色、際立ってその白さ、黒さが意識されない肌色という解釈が適当であると考えられる。男性において「普通」という回答が頻出すること、そして女性において「普通」が少ないことの背景には肌色に対する意識の違いがあると考えられる。[好ましい男性の肌色]としては、やや色黒寄りの肌色が望まれていることは本結果からも把握できるが、他方の女性に対してはより明確な方向性が示されている。すなわち、より色白の方が好ましいという方向性である。

更に、Table 2-2-5、2-2-6 では現実と理想のクロス集計結果を示しているが、現状に満足している男性は 45 人中 24 人であるのに対し (53.3%)、女性は 36 人中 13 人 (36.1%) に留まっている。こうした結果からは、女性に対してより強いステレオタイプ的な縛りが働き、結果として肌色に対する意識も高められていくことが推測される。また、「普通」という回答は「どちらでもよい」という意識の表明

とも解釈される。このことより、男性において許容される肌色の範囲の方がより広いのではないかと推察される。